

民俗資料館だより

March 31st, 2019

KAMO CITY MUSEUM OF HISTORY NEWS No. 26

加茂市民俗資料館
館報 第26号

平成31年3月31日発行

編集・発行

加茂市民俗資料館

民俗資料館の天狗面

加茂市文化財調査審議会委員

丸山 朝雄

民俗資料館の玄関を入ると直ぐガラス戸越しに大きな赤い異様なものが眼に入る。戸を開けて中に入ると、そこはもう展示室で、正面の壁いっぱいを塞いでいる。あまりに大きく、距離を置いて眺める

余裕がない。なにしろ縦2m40cm、横2m22cm、鼻の高さ1m22cmの巨大な天狗の面である。少し離れて見直そうにも小さな展示室でスペースがない。



民俗資料館 展示 天狗面

青海神社の祭礼は、毎年行われるものの他、「六十一年式年祭」が行われる。本品は、昭和55年、61年ぶりに巡ってきた「式年祭」で「道案内の神様」として山車行列の先頭を飾ったもので、「六十一年式年祭岡ノ町方奉賛委員会」の青年達が二ヶ月かかりで作り上げたと言う。隣りの大昌寺にあった古い面（大正9年「式年祭」）を手本としたと聞く。左下の写真は西村一慶和尚からお祓いをしてもらって借り受けた時のものである。



静かに降ろされる
大昌寺の古い天狗の面

大昌寺西村一慶
和尚と共に（下）



【製作過程 一部紹介】



高級和紙にて表具（1）



高級和紙にて表具（2）



タケノツケによる髪作り

渡辺画伯による着色



髪の取付けを待つ天狗



台車作り



法螺方の四人衆

（民俗資料館展示写真）

天狗様は、大程の祭礼の御神幸で道案内または魔除けとして先導にたたれる。それは日本最古の歴史書「古事記」に天照大神から「天津瓊瓊杵尊^{あまつににぎのみこと}は日本へ降り始めよ」と命ぜられる天孫降臨^{てんそんこうりん}の条^{くだり}があるが、三種の神器などを賜わり、多くの神々を従え、日向^{ひゅうが}の高千穂の嶺に降りられた。上は高天原を照らし、下は豊葦原^{とよあしほら}を照らす神がいるのが見えた。汝は誰かとたずねると、『天孫の降臨を聞き伝えたので先導を申し上げようとまかり出て、お待ち申し上げているのです。』と。これが猿田彦の神である。

この伝誦^{でんしよう}を踏まいつつ、神仏に対する畏れとおそ^{おそ}敬虔^{けいけん}な心を込めて作り上げたお面なのである。

（※写真：青海神社所蔵文書「天狗面」

民俗資料館展示写真）

館外活動

1 社会科出張授業

期日 30年4月25日 七谷小学校6年生
内容 縄文時代・弥生時代の社会を探ろう

2 映像で振り返る「懐かしの加茂」

期日 1回目 30年8月15日(水)
2回目 30年11月29日(木)
時間 午後2時～3時30分(1・2回とも)
会場 加茂市立図書館 視聴覚室

一般参加者 1回目22名・2回目32名
映写内容

- ① 「長瀬神社春季例大祭」
- ② 「昔を偲ぶ加茂の風景」
- ③ 「8月水害」



3 古文書講座

時間 午後7時～8時40分
会場 加茂市公民館 第1研修室

第1回

期日 平成30年10月16日(火)
(台風接近により日変更)
一般参加者 21名

講師 関 正平 氏

(加茂市文化財調査審議会委員)

テーマ「天保の八十里越改修と通行の記録」

【講座内容】

戊辰150年、河井継之助が「腰ぬけ侍」といって、戸板に背負われた八十里越え。様々な行き来があり、親しみのある道である。江戸後期の改修の記録と通行の記録をみた。

入広瀬・浅井家に残る八十里越改修につき規定書によると天保10年(1839)付けで村松町源三郎が金主元となり、村松藩領村々、入広瀬村々がそれぞれ普請金を負担して工事を始めようという取り決めであった。工事から11年後、叶津番所を通る「往来日記」には、嘉永元年から安政2年(1848～1855)までの間に229グループ、770人の通行が確認できる。

第2回

期日 平成30年9月11日(火)

一般参加者 20名

講師 長谷川 昭一 氏



(加茂市文化財調査審議会副委員長)

テーマ「七谷村長 小野周平の書簡」

【講座内容】

七谷村長小野周平の書簡から小野周平の業績を紹介するとともに七谷村の政治状況をみた。

明治33年、七谷村長に初当選し、昭和11年まで33年間村長として村政に尽くした。その間、新潟県会議員、新潟県教育会長、新潟県農会長など要職を歴任した。明治43年、七谷村は内務省から全国29の模範村の一つとして推奨された。前村長鶴巻亀太郎以来、七谷村の主流派は民政党であった。

第3回

期日 平成30年9月18日(火)

一般参加者 22名

講師 中澤 資裕 氏

(加茂市教育委員会

社会教育課長補佐)



テーマ「稲荷神社と金谷大倉」

【講座内容】

金谷大倉は初め修験で、明治維新後還俗し、稲荷神社の基礎をつくった。江戸時代の金谷氏は大龍院の院号をもち、修験道当山派に属していたが、各地の寺社と交流があり、とりわけ、伏見稲荷と頻繁な行き来があった。

江戸時代の伏見稲荷は一枚岩ではなく、宗教者3派(秦氏・荷田氏・愛染寺)に分かれ、競合もしくは対立していた。大龍院は愛染寺とゆかりが深く、許状などを受けていたが、安永2年(1773)に陣ヶ峰の稲荷社が慶応元年(1865)に上土倉の鶴巻多兵衛が得た神爾や大麻は社家方(秦氏)から獲得しており、京都における争いが市域にも影響していた。

第4回

期日 平成30年9月25日(火)

一般参加者 21名

講師 佐藤 賢次 氏

(加茂市文化財調査審議会委員)

テーマ「賀茂明神の神宮寺と宮坊」



【講座内容】

賀茂明神（青海神社）は神仏習合の社として有名で、明治の廃仏毀釈で廃棄されるまで、境内（現在の公民館の場所）に神宮寺という寺を持っており、社僧（宮坊）は慶長5年（1600）に武蔵国忍（埼玉県行田市）出身の通巖法印という修験僧が入院して以来、雛田家が8代にわたって勤めた。

雛田家5代の利恭が神宮寺本尊の由来を述べた「当寺本尊来由記」を読み合ったが、著者の利恭は自らを「神宮寺7世」と名乗っている。すると雛田家初代の通巖は神宮寺3世ということになり、通巖が入院する前に2代ほど雛田家以外の社僧がいたことがわかり、境内の神宮寺は上杉謙信時代に創建されたということができる。

第5回

期日 平成30年10月2日(火)

一般参加者 19名

講師 丸山 朝雄 氏

(加茂市文化財調査審議会委員)

テーマ「田代克子氏所蔵文書

田代氏由緒（鶴森八幡宮）」



【講座内容】

田代家の先祖は伊豆から鶴森に来て土着したと云われている。江戸時代、幕府は京都の吉田家を通じて神職を統制した。吉田家から神道裁許状という免許状を請けて神主として身分が正式になる。田代家は代々、吉田家から裁許状を請けた。

鶴森は明応元年（1492）、小西隼人候政と候吉の兄

弟が鶴森を切り開いたと云われている。

また、鶴森八幡宮拝殿の格天井には躍動感溢れる花鳥の絵画があり、珍しい。

4 歴史講演会

期日 平成30年11月17日(土)

一般参加者 60名

時間 午後2時～3時30分

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 長谷川 昭一 氏

(加茂市文化財調査審議会副委員長)

テーマ「戊辰戦争150年と加茂」



【講演内容】

慶応4年(1868)1月3日、鳥羽・伏見の戦いに始まる戊辰戦争。3月、桑名藩の強硬派が柏崎に入った。閏4月17日、加茂町市川家に桑名前藩主松平定敬が駐留し、同盟軍の拠点となる。同じ頃、狭口村庄屋笠原寛八の二男、松田秀次郎が方義隊を結成し、のち、隊名を居之隊と称し、隊長として新政府軍に協力して戦った。

加茂が①桑名藩の預かり地であった②信濃川が新潟、長岡へ通じ、交通の要衝であった③会津藩領に近かった④巨大地主（田上町の田巻三郎兵衛・田巻七郎兵衛・加茂町の市川家）の兵糧米があったから加茂が越後における最後の拠点となった。

加茂町を本拠とした同盟軍は、加茂新田に会津兵、加茂山南部と下条に桑名兵を配備し、新政府軍の追撃に備えた。新政府軍は天神林に薩摩、長州、加賀の兵が着陣し、侵攻の機をうかがっていた。加茂や上条の商人は妻子や商品を近くの村へ移した。

天神林村庄屋は「騒ぐべからず・腹を据えるべし。」と、騒ぎ始める住民を諭し、避難させた。

8月4日の早朝から加茂攻防の戦いが始まったが、同盟軍は夜陰にまぎれて敗退した。戦火により、下条で11軒、加茂町で25軒が焼失したが、加茂の人

たちが町中での戦争を回避し、町を大火にさせなかった努力は大きかった。さらに、加茂は敗れた同盟軍の兵士の墓を建て、寺院で葬るなど遠く故郷を離れて眠る敗者にも優しくかった。

5 特別歴史講演会

期日 平成31年3月2日(土)

一般参加者 96名

時間 午後2時～午後4時

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 矢田 俊文 氏

(新潟大学人文学部教授)

テーマ 「加茂長福寺と上杉謙信」

【講演内容】

中世後期 越後真言宗寺院の実態を明らかにした上で、おもに、聖教と血脈によって、天正三年(1575)の実像を示す史料として知られる越後上杉談義所空陀法印御坊宛(天正四年)十月十五日付甲州教雅書状の発給者甲州教雅がいかなる僧なのかを検討した。

明らかにしたことは以下の通りである。

- (1) 室町期に越後の信濃川河口の港町沼垂(新潟市)に真言宗寺院が存在していたこと、東京都日野市高幡不動所蔵「秘鈔問答」の奥書により、戦国期、越後国の真言宗寺院である法花寺と正法寺は積極的に学問に努めていたことがわかる。
- (2) (天正四年)十月十五日付甲州教雅書状の宛所の越後上条談義所は越後加茂の長福寺で、同寺院は真言宗山本流の法脈を伝えることを改めて確認した。

高野山正智院所蔵の「金剛王院伝授聖教目録」奥書には、文化十年(1814)、大和国生駒山宝山寺の龍肝は、覚済国師が、「金剛王院伝授聖教目録」を高野山迎接院静助僧都に授け、静助は越後国長福寺長智上人



に授与し、それ以来、相続伝流し、この流を山本流と称するのだと記している。覚済は瑚醍寺座主となり、その後、東寺長者をつとめ、再び瑚醍寺座主となった僧で、金剛王院流の一派山本流の祖とされている。静助は二条関白の子で迎接院と号された僧である。越後長福寺長智上人は、この高野山迎接院静助から「金剛王院伝授聖教目録」を授与された。この長智が加茂の長福寺の開基とされる僧である。

千葉県匝瑳市の長徳寺所蔵の「三宝院灌頂大事」奥書によれば、長智(七十歳)が、延文二年(1357)、講接(迎接)院口決を記している。それを長鏡(二十八歳)が康安元年(1361)に写し、さらに、長乗(二十八歳)が応永二十一年(1414)長福寺で写している。このことから、応永二十一年には長福寺が存在していたことが確認できる。

- (3) 甲州教雅は、真言宗の学僧円性坊教雅であり、甲斐真言宗寺院加賀美山法善寺の僧であった。
- (4) 永禄五年(1562)に甲州円性坊教雅が野狐放秘法を紀州の玄恵に授与し、その玄恵は文禄三年(1594)、相州八大坊秀海に授与したこと、さらに大山寺に伝わっていた野狐放秘法をもとに近世の「大山不動靈驗記」の「甲州ノ僧教雄、阿遮(闇)梨信玄公ノ息女ノ狂心ヲ祈リテ平愈セシ事」の話が形成されたことを明らかにした。

これまで語りつくされてきた上杉謙信に関わる歴史認識にとらわれず、矢田先生の中世史研究をまとめるような内容であった。



平成30年度の歩み

1 入館者数《平成30年4月～平成31年3月》

	市内	市外	計	団体
大人	199	612	811	2
中学生以下	207	37	244	6
計	406	649	1,055	8

2 資料収集の状況

本年度、下記の方から貴重な資料をご寄付頂きました。お礼申し上げます、紹介させていただきます。

〈寄贈者名及び寄贈品名〉

泉田 友一 様（加茂市）より 考古資料 1点
 鶴巻フサエ 様（加茂市）より 歴史資料 3点
 石井 敏枝 様（加茂市）より 歴史資料 1点
 小川真由美 様（三条市）より 歴史資料 7点

3 レファレンス・サービス及びアンケート調査

① レファレンス・サービス（件）

（資料館への問い合わせの主なもの）

- ・加茂のお祭り・青海神社について資料を頂きたい。
⇒青海神社のパンフレットを紹介。
- ・北越の小京都の由来を知りたい。
⇒自然環境や神社など京都との関連について説明する。
- ・加茂城跡で採取した陶器はいつ頃のものか。
⇒近世の播鉢（すりばち）ではないかと回答。
- ・駐車場の一面にある石垣を縄で囲ってある場所はなにか。
⇒青海神社の神事である鎮火祭を行う場所であると回答。
- ・松田秀次郎の建碑計画書が大崎山となっているが、今でも建っているのか。
⇒今でもあると回答。
- ・加茂山にある爺杉やユキツバキ、公園、多層塔などについて教えてほしい。
⇒「ふるさと歴史散歩」などを参考に回答。
- ・松原人形についてお聞きしたい。
⇒加茂の風土記などを参考に回答。
- ・蒲原鉄道七谷駅の位置について知りたい。
⇒当時の地形図をコピーし、送付。
- ・浅野家について知りたい。ついては展示資料「浅野家文書」を見たい。
⇒「浅野家文書」を写真に撮り、送付。

② 来館者の声

- ・実物の展示がよい。さらに考古や近代関係の展示物から出土場所、史跡へとつながる「仕掛け」がほしい。
- ・和紙で作った人形行列に感動します。
- ・昔の職人さんの姿、時代を感じました。
- ・品や保存物は素晴らしい。改善できるのは、展示コーナーの流れ、シンプルさ、陳列方法、一貫性を保つことだと思う。
- ・大変懐かしく拝見させていただきました。これだけ資料を管理するのは大変な労力があることでしょう。
- ・実際に触ってみたりできるのが本当によかった。

平成31年度の事業予定

1 社会科出張授業

- ・対象 小学校6年生～高校生（希望する学校）

2 映像で振り返る「懐かしの加茂」

期日 第1回 2019年 8月11日（日）

第2回 2019年11月29日（金）

時間 午後2時～3時30分（1・2回とも）

会場 加茂市立図書館 視聴覚室

内容 「昔を偲ぶ加茂の風景」

3 古文書講座

第1回 9月 3日（火）長谷川昭一 氏

第2回 9月10日（火）佐藤 賢次 氏

第3回 9月17日（火）関 正平 氏

第4回 9月24日（火）中澤 資裕 氏

第5回 10月 1日（火）丸山 朝雄 氏

時間 午後7時～8時40分（1～5回とも）

会場 加茂市公民館 第1研修室

内容 未定

4 歴史講演会

期日 2019年11月30日（土）

時間 午後2時～4時

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 松岡 誠一 氏 内容 未定

5 特別歴史講演会

期日 2020年3月を予定

会場及び講師 未定

平成30年度遺跡発掘調査について

本年の遺跡調査は、3遺跡を対象とした試掘・確認調査が行われた。

1 三場C遺跡隣接地

調査地 加茂市宮寄上地内

調査期間 平成30年7月30日

調査原因 農業基盤整備事業

調査の概要 調査地は標高約94mの段丘上にある。9か所にトレンチを設けたが、現況地形は整地や削平されたものと見られ、遺跡は確認できなかった。



三場C遺跡位置図



三場C遺跡 5トレンチ

2 舟戸遺跡—古代・中世—

調査地 加茂市加茂地内

調査期間 平成30年11月19日

調査原因 農業用排水路改良工事

調査の概要 6か所にトレンチを設けた。現在土水路の底面から約1mほど掘削したが、地山面を確認できなかった。しかし、排水路に古墳～古代の土器が散布しており、周辺に遺跡が広がる可能性が高い。



舟戸遺跡位置図



舟戸遺跡 6トレンチ



舟戸遺跡 表探遺物

3 鬼倉遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市下条地内

調査期間 平成30年11月20日

調査原因 農業用排水路改良工事

調査の概要 5か所にトレンチを設けた。腐植物層が顕著に堆積し、地山面を把握できなかった。



鬼倉遺跡位置図



鬼倉遺跡 3トレンチ

資料紹介

千刈遺跡出土の漆補修土師器について

伊藤秀和

千刈遺跡は6世紀前半、古墳時代後期の集落と見られる遺跡で、土師器が多量に出土している。ここに紹介する資料は、いずれも土師器甕の底部で、土器の割れ目に黒色の付着物が見られ、破片どうしを漆液で接着し補修したものと考えられる。3点確認できた。

1は底径7.3cmで、底部～体部にかけての内外面に幅3～4cmの黒色漆が帯状に付着する。2は底径7.0cmで、底部～体部にかけての内外面に幅2cmの黒色漆が帯状に付着する。3は底径6.0cmで、底部内面に幅1cmの黒色漆が帯状に付着する。また、割れ口にも漆の付着を確認できる。

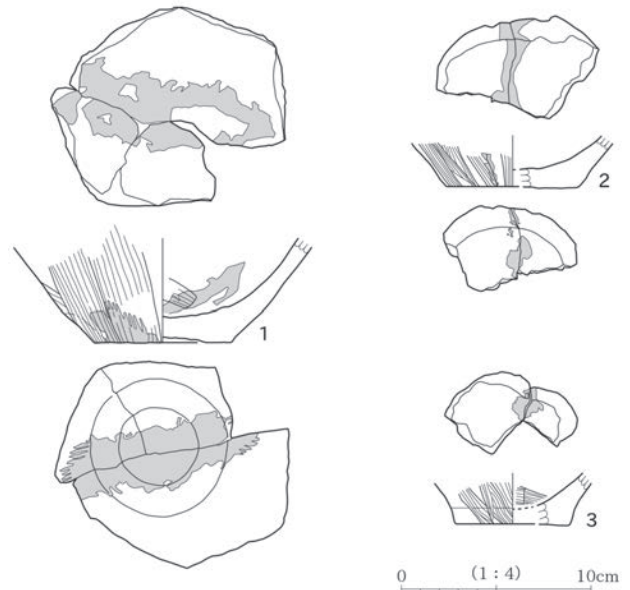
漆液を接着剤として利用することは、縄文時代～現代まで行われている。弥生時代の再葬墓の壺型土器などで漆液による補修が見られるようだが（阿部泰之氏ご教示）、古墳時代の土師器は珍しい印象がある。今後、類例を渉猟する中で、古墳時代における漆文化の一端について考えていきたい。

報告にあたり、阿部泰之氏、四柳嘉章氏から多大なご教示を賜った。記して御礼申し上げます。

引用・参考文献

加茂市 2018 『加茂市史』資料編4 考古

国立歴史民俗博物館 2017 『企画展示 URUSHIふしぎ物語—人と漆の12000年史—』



漆補修土師器 S=1/4



1外面



2外面



3内面



1内面



2内面



3割れ口

編集後記

昭和の「六十一年式年祭」は市民参加の熱意あふれる賑わいを見せたと聞きます。2040年はどんな絵巻が繰り広げられるのでしょうか。

最後になりましたが、今回玉稿をお寄せくださいました丸山朝雄先生に厚く御礼申し上げます。

加茂市民俗資料館

- 開館時間 9:00 ~ 17:00
 - 休館日 月曜日、毎月第1,3,5土曜日 祝日、年末年始
- ※ 但し、4,5月は月曜日のみ（祝日に当たるときは次の平日）
- 〒959-1372 新潟県加茂市大字加茂229番地1
TEL / FAX: 0256-52-0089
E-mail: minzoku@city.kamo.niigata.jp